

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

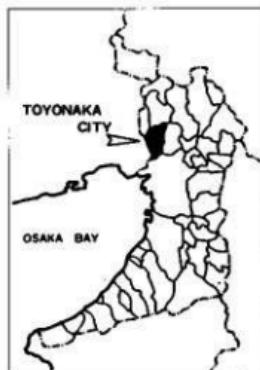
1991(平成3)年度

1992(平成4)年3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1991(平成3)年度



1992(平成4)年3月

豊中市教育委員会

## 序 文

豊中市は、今まで、商都大阪の繁栄とともに、近代的な都市としての発展を続けてまいりました。ところが近年、大都市に隣接するベットタウンとしての開発が、われわれの予想をはるかに凌駕する速さで進み、継なす豊かな自然や、遠く大阪平野を見渡す景観がしだいに失われようとしております。また、こうした開発は、悠久の昔からこの土地を守り、育んできた先人たちの営みをも永遠に消し去ろうとするものであります。

やがて訪れるべき未来社会に、われわれは誇りをもってこれらの自然や文化遺産を伝えていかなければなりません。そして、新たなまちづくりの中では、より良い、うるおいのある生活を得るために努力が求められはじめています。こうした声は、今後ますます高まってくるものと思われ、ふるさとの自然、歴史、文化が日常的な都市計画の中で、以前にも増して重要な役割を担ってくることは自明の理でもあります。

この報告書は、このような流れの中で埋蔵文化財の重要性を鑑み、平成3年度事業として國ならびに大阪府の補助を受けて緊急発掘調査を実施した、新免遺跡と御獅子塚古墳に関するものであります。新免遺跡は豊中市でも有数の集落遺跡として知られ、また御獅子塚古墳は國指定史跡の桜塚古墳群に残されたわずか5基の古墳の一つで、ともに継続して調査が行われ、その重要性が判明しています。今回の調査でも新たなる知見が加えられ、ふるさとの歴史を解明する好資料を得たと確信しております。

調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導を賜り、土地所有者ならびに近隣の方々には文化財の重要性に対して深いご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係各機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のひとかたならぬお力添えにより、豊中市の文化財保護行政を推進してまいることができました。ここに厚くお礼申し上げると同時に今後のさらなるご支援をお願い申し上げます。

平成4年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 青木伊織

## 例 言

1. 本書は豊中市教育委員会が平成3年度国庫補助事業(総額3,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%)として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、新免遺跡、御獅子塚古墳について実施した。平成3年4月22日～平成4年3月31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行った。
3. 発掘調査は本市教育委員会の社会教育部社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は下表に示すとおりである。
4. 本書の執筆は、位置と環境および新免遺跡第39次調査を清水 篤が、新免遺跡第40・41次調査を橋山正徳が、御獅子塚古墳を柳本照男が執筆、編集した。なお、本書全般に関わる編集は清水が行った。
5. 各調査地の土地所有者、施工業者、ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護に対して深い御理解と御協力をいただきました。また、本書の作成にあたって関係各位より、多くの御助力をいただきました。あわせてここに明記し、深謝いたします。

遺跡名	調査地	調査面積	担当者	調査期間
新免遺跡	39次 豊中市玉井町3丁目77番地	180m <sup>2</sup>	清水 篤	平成3年4月22日～5月20日
新免遺跡	40次 豊中市玉井町1丁目262番地	84m <sup>2</sup>	橋山正徳	平成3年4月22日～5月28日
新免遺跡	41次 リ	17m <sup>2</sup>	リ	平成3年5月7日～5月20日
御獅子塚古墳	6次 豊中市南桜塚3丁目80番地	158m <sup>2</sup>	柳本照男	平成3年12月24日～ 平成4年1月18日

## 目 次

第I章 位置と環境.....	1
第II章 新免遺跡第39次調査の概要	
1. 調査の経緯.....	3
2. 調査の概要.....	3
第III章 新免遺跡第40・41次調査の概要	
1. 調査の経緯.....	7
2. 調査の概要.....	8
第IV章 御獅子塚古墳第6次調査の概要	
1. 調査の経緯.....	15
2. 調査の概要.....	16

## 図版目次

図版1 新免遺跡第39次調査地点	(1)調査区全景（南東から） (2)調査区西壁断面
図版2 新免遺跡第40次調査地点	(1)調査前風景 (2)遺構検出状況（東より）
図版3 新免遺跡第41次調査地点	(1)東区遺構検出状況（南より） (2)西区遺構検出状況（西より）
図版4 御獅子塚古墳第6次調査地点	(1)調査区全景 (2)周濠検出状況
図版5 御獅子塚古墳第6次調査地点	(1)周濠断面 (2)〃
図版6 御獅子塚古墳第6次調査地点	(1)周濠完掘状況 (2)〃

図版 7 御獅子塚古墳第6次調査地点 (1)周濠挖掘状況  
 (2)墳丘と周濠との関係

挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図	2
第2図 調査範囲図	3
第3図 調査地点位置図	3
第4図 調査前風景	4
第5図 調査風景	4
第6図 調査区平面図 (1:80)	5
第7図 調査範囲図 (1:400)	7
第8図 調査地点位置図 (1:5000)	7
第9図 土坑1 平面図・断面図 (1:40)	8
第10図 " 出土遺物実測図 (1:4)	8
第11図 調査区平面図・断面図 (1:40)	折り込み
第12図 土坑2 平面図・断面図 (1:40)	11
第13図 " 出土遺物実測図 (1:4)	11
第14図 井戸断面図 (1:40)	11
第15図 井戸2 出土遺物実測図 (1:4)	12
第16図 調査地点位置図	15
第17図 調査範囲図 (1:400)	16
第18図 遺構全体図	17
第19図 周濠断面図	18
第20図 周濠出土遺物実測図	18
第21図 御獅子塚古墳全体図	19

表目次

第1表 新免遺跡第39次調査 検出遺構便覧	6
第2表 新免遺跡第40次調査 検出遺構便覧	13
第3表 新免遺跡第41次調査 検出遺構便覧	14

## 第Ⅰ章 位置と環境

**遺跡の立地** 豊中市は、地形的には丘陵部から低湿地にいたるまでの非常に変化に富んだ特色を備えている。まず、北部には、鳥熊山や千里ニュータウンを中心とする丘陵部と、そこから派生する高位段丘がわずかに拡がり、遠く淀川を隔てて河内平野の眺望を楽しむことができる。また、豊中市の中央部を占める中位・低位段丘は、通称、豊中台地と呼ばれ、古くから交通の要衝として発展し、現在では大都市圏に隣接する住宅地として人口の密集する地帯となっている。そして、これらの段丘崖から南側へ下ると、神崎川や猪名川などの氾濫によってつくられた温潤で広大な沖積平野が拡がっている。とりわけ大阪市と隣接する地域は、工業地帯として繁栄している。一方でこうした繁栄の陰で、多くの文化遺産も失われていった。

今年度、調査の対象となった新免遺跡と御獅子塚古墳（桜塚古墳群）は、ともに豊中市中央部の洪積台地上に立地するが、新免遺跡はすぐ西側に猪名川流域へ向かって流れる千里川の段丘崖をひかえた部分に、桜塚古墳群は台地の南側に各々位置する。周辺はともに閑静な住宅街で、現在の状況からは遺跡が営まれた時代に思いを馳せることすら困難である。

**歴史的環境** 豊中市内では、前述したような開発にもかかわらず、ほぼ全域に埋蔵文化財の包蔵地（遺跡）が分布している。しかもそれらは旧石器時代から、江戸時代にいたるまでの広範な時期を網羅している。ここではこうした遺跡群の中で、今回調査の対象となった新免遺跡と御獅子塚古墳について簡単に触れ、後節の理解の一助としたい。

新免遺跡では、今までに38ヶ所の調査が行われてきた。その成果によると、弥生時代から平安時代頃まで連続と人間活動の痕跡が認められている。しかし、遺跡のピークは弥生中期～後期、古墳中期～後期にはほぼ限られている。検出された遺構の中でも、弥生時代における20棟余りの竪穴住居と方形周溝墓は特筆すべきもので、巨大な集落の存在を示唆している。勝部遺跡をはじめとして冲積地に点在する弥生時代集落との存立基盤の差異を明らかにしていくことが今後の課題であろう。古墳時代に入ると須恵器生産との関わりで、南北に隣接する本町遺跡や山ノ上遺跡へ集落の中心が移動して行き、やや衰退していくことになる。

御獅子塚古墳は、国指定史跡桜塚古墳群内に現存する5基の古墳のひとつで、全長約55mの前方後円墳である。環境整備事業に伴って、数次にわたる調査が行われ、2基の主体部から鉄製の甲冑、武器、馬具、革製漆塗り盾等が検出されていて、5世紀の中頃を前後して営まれたことがわかっている。桜塚古墳群は大阪平野の古市・百舌鳥古墳群を背後に據する重要な拠点である。ここでは東群の大石塚、小石塚古墳から、西群の大塚古墳へと盟主墳が続き、御獅子塚古墳へと権力が継承されていったと推定されている。



- |                        |             |            |            |            |              |
|------------------------|-------------|------------|------------|------------|--------------|
| 1. 宝池北遺跡<br>(恵田市宮ノ前遺跡) | 10. 新免富山古墳群 | 20. 地形遺跡   | 30. 梅塚古墳   | 40. 芦竹町遺跡  | 50. 利合南遺跡    |
| 2. 行家山遺跡               | 11. 金寺山発寺   | 21. 駒橋東遺跡  | 31. 保田中町遺跡 | 41. 赤内遺跡   | 51. 眼部西遺跡    |
| 3. 奈良遺跡                | 12. 上野遺跡    | 22. 草町北遺跡  | 32. 保田城跡   | 42. 横積遺跡   | 52. 上津島川床遺跡  |
| 4. 宝池東遺跡               | 13. 鹿野町遺跡   | 23. 小石塚古墳  | 33. 京田遺跡   | 43. 小曾根遺跡  | 53. 上津島遺跡    |
| 5. 清田落葉塚跡              | 14. 黑縄遺跡    | 24. 大石塚古墳  | 34. 曽根遺跡   | 44. 今内氏聚落  | 54. 上津島島遺跡   |
| 6. 宝池西遺跡               | 15. 新免遺跡    | 25. 大塚古墳   | 35. 保田元町遺跡 | 45. 北条遺跡   | 55. 横積ポンプ場遺跡 |
| 7. 南刀根山遺跡              | 16. 山ノ上遺跡   | 26. 御獅子塚古墳 | 36. 曽根南遺跡  | 46. 利合北遺跡  | 56. 畠田遺跡     |
| 8. 開神山古墳               | 17. 下原麻呂群   | 27. 南天平坂古墳 | 37. 豊島北遺跡  | 47. 球堂の西遺跡 | 57. 庄内遺跡     |
| 9. 本町遺跡                | 18. 赤井遺跡    | 28. 横堀古墳群  | 38. 城山遺跡   | 48. 芦舟西遺跡  | 58. 乌江遺跡     |
|                        | 19. 鹿田西遺跡   | 29. 長興寺遺跡  | 39. 鹿部遺跡   | 49. 利舟遺跡   |              |

第1図 周辺の遺跡分布図

## 第II章 新免遺跡第39次調査の概要

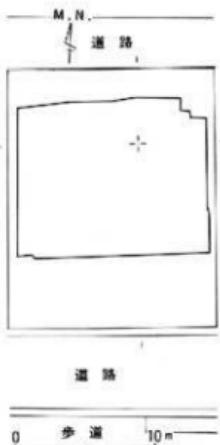
### 1. 調査の経緯

調査地点は、玉井町3丁目77番地に所在し、個人住宅の建設予定地であった。周知の新免遺跡の範囲に該当するため、あらかじめ立会調査を行い、遺構等が検出されたために当該調査を行う運びとなった。住宅の建築範囲内を調査することとし、対象面積は180m<sup>2</sup>となった。敷地内には、残土置場の余地が無く、反転調査を行った。

### 2. 調査の概要

#### (1) 基本層序

調査区内の基本層序は、第I層が旧建築物による搅乱土と盛土、第II層は若干しか残存していないが、主として黒褐色を呈する粘質土で構成された古墳時代～中・近世の遺物包含層であ



第2図 調査範囲図



第3図 調査地点位置図

る。第III層は洪積層であり、明黄灰色を呈するシルト及び粘土層と、拳大の礫層からなる。第III層は無遺物であるとともに、新免遺跡全体での遺構面を形成している。

## (2) 検出遺構と遺物

基本層序の第I～II層は、層厚約40cm程度を測る。これを除去すると遺構面が検出されるが、擾乱と削平が著しく、とくに当該調査地付近は旧豊中グランドの跡地であることから、遺構の残存状態は極めて悪かった。検出された主な遺構はピットで、約40基を数えるが、建物としての規格に合致するようなものは残念ながら皆無であった。遺構の埋土は、全体を通じてほぼ同一で黒褐色の粘質土であり、基本層序の第II層と同様の土質、土色を示している。

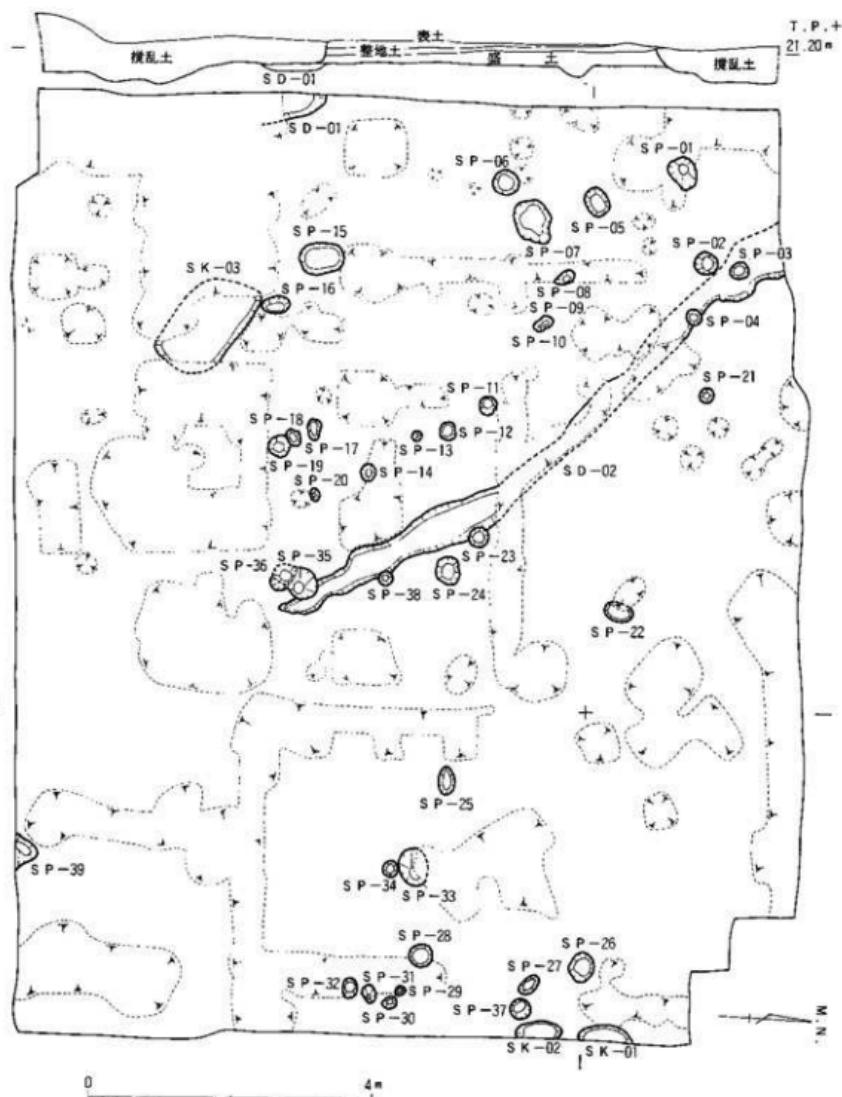
遺構及び包含層から出土した遺物は、ほとんどが細片で、図化し得るもののが無かった。ただし、SP-23から出土した土器器の体部破片は奈良時代以降の時期を示しており、同ピットから瓦器碗の小破片も出土していることから、新免遺跡では希薄な奈良～平安時代の遺構群を含んでいる可能性が高いものと考えられる。今後、周辺での調査では当該時期の遺構に留意する必要がある。



第4図 調査前風景



第5図 調査風景



第6図 調査区平面図 (1:80)

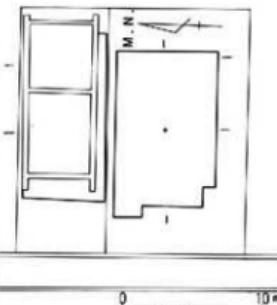
遺構番号	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	埋土(シルト～細砂)
S P - 01	44	36	26	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 02	32	24	16	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 03	24	22	14	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 04	22	20	16	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 05	40	32	12	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 06	38	36	11	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 07	64	44	28	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 08	24	16	18	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 09	16	12	16	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 10	12	12	12	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 11	24	22	28	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 12	22	21	20	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 13	16	12	8	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 14	22	20	22	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 15	60	41	26	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 16	40	22	20	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 17	24	18	21	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 18	23	19	10	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 19	34	32	23	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 20	20	16	22	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 21	20	20	21	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 22	40	24	6	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 23	24	23	12	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 24	40	38	17	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 25	40	22	6	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 26	42	36	20	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 27	36	20	21	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 28	26	25	16	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 29	15	12	11	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 30	20	16	20	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 31	22	15	31	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 32	24	19	23	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 33	56	40	30	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 34	11	10	12	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 35	44	39	14	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 36	40	24	16	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 37	24	23	29	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S P - 38	20	19	5	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S P - 39	52	44	22	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S K - 01	78	11	30	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S K - 02	62	12	10	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S K - 03	160	85	30	黒褐色&暗灰黄色+明黄褐色(2.5Y 7/6)ブロック
S D - 01	60	40	38	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)
S D - 02	880	60	8	黒褐色(10YR 3/2) & 暗灰黄色(2.5Y 5/2)

第1表 新免遺跡第39次調査 検出遺構便覧

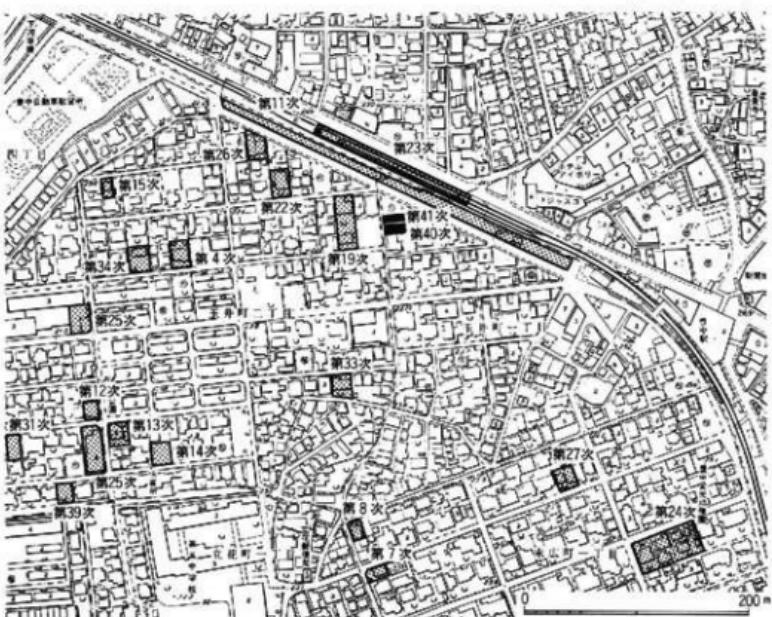
### 第三章 新免遺跡第40・41次調査の概要

#### 1. 調査の経緯

新免遺跡第40・41次調査地点は、ともに豊中市玉井町1丁目262番に位置する。本来、同一地番であるが、土地所有者が相違することから調査区が分離することとなった。今回、それぞれの土地所有者より住居新築の申請が提出され、これに基づき試掘調査を実施した。試掘調査の結果、現地表面下約20cmのところで遺構を検出した。よって、個々の建物範囲の全面を調査の対象とし、第40次調査は4月22日より31日間の日程で、第41次調査は5月7日より13日間の日程で両調査地点の調査を実施した。



第7図 調査範囲図（1：400）



第8図 調査地点位置図（1：5000）

## 2. 調査の概要

### (1) 基本層序

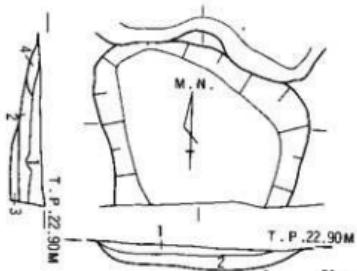
現地表面より近現代の整地層、旧耕作土層、白灰色粘土層の順で堆積する。遺構はすべて、地表より約10cm~20cmの深さにある白灰色粘土層上面で検出した。なお、遺物包含層は後世の削平を受け消滅したらしく、確認されなかった。また、旧耕作土層から古墳時代から近世に至る遺物が若干採集された。

### (2) 検出した遺構

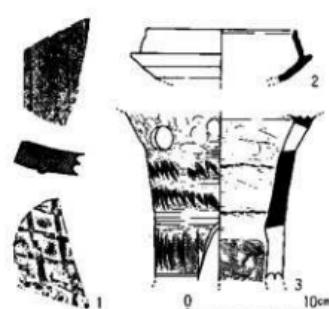
第40次調査区では土坑9基、井戸3基、柱穴を含むピット14基、溝5条、落ち込み状遺構2基を検出した。第41次調査区では、柱穴を含むピット20基、溝2条を検出した。これらの遺構から出土した遺物は少なく、その所属時期を決定できる遺構は限られるが、大まかには古墳時代から近世までの何れかの時期に所属するものと考えられる。以下、主要な遺構について、概要を述べることにする。

**土坑1** 第40次調査区南西部にて検出した土坑である。遺構の南側は調査区外にのびるために正確な平面形上は知り得ないが、現状から東西1.4mの隅丸方形の平面を呈し、深さ20cmのながらかな掘り込みを呈する土坑と推定される。埋土は褐色の粘質土で少量の地山ブロックが混入する。埋土中より第10図の平瓦、須恵器坏身、器台が出土した。これらの遺物の時期はすべて異なるため、遺構の時期を決定することはできない。ただ、平瓦の凸面に施された叩きが金寺山廃寺出土の平瓦の叩きの特徴と一致することから、遺構が7世紀を通りえることはない。なお、第19次調査地点において7世紀頃と推定される建物群が検出されているが、この建物群と土坑1の平瓦の関連については不明である。

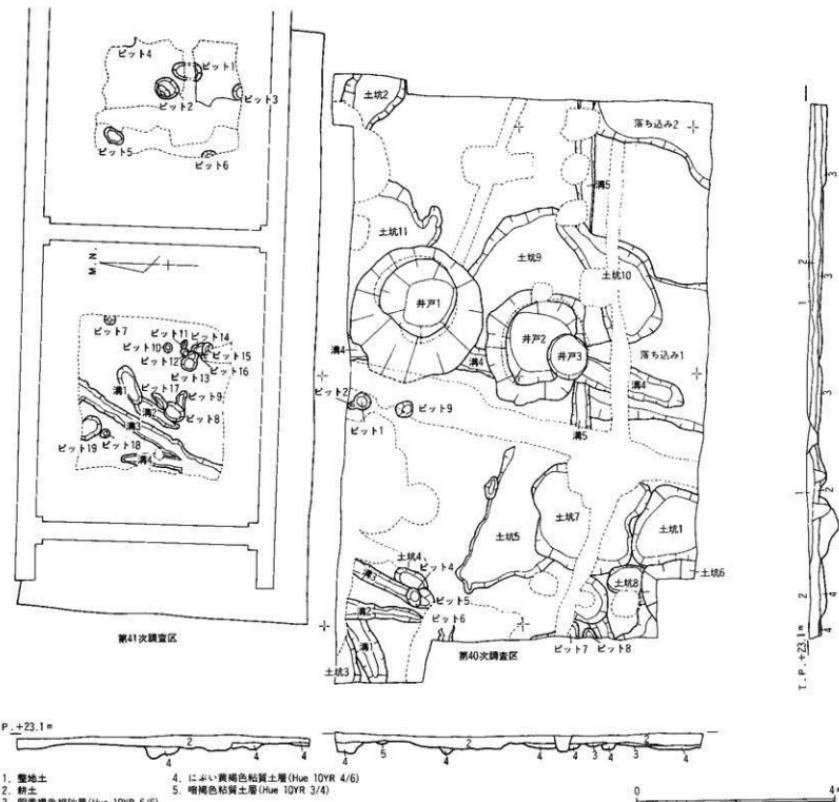
**土坑2** 第40次調査区北東部にて検出した古墳時代の土坑である。遺構の西側は攪乱によっ



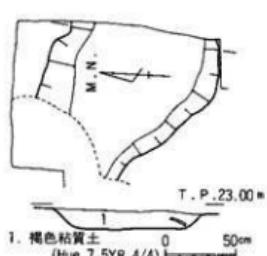
1. 灰褐色粘質土 Hue7.5YR 4/2 3. 黄褐色粘質土 Hue10YR 5/6  
2. 褐色粘質土 Hue7.5YR 4/3 4. 橙色粘質土 Hue7.5YR 4/4



第9図 土坑1 平面図・断面図(1:40) 第10図 土坑1 出土遺物実測図(1:4)



第11図 調査区平面図・断面図 (1 : 80)

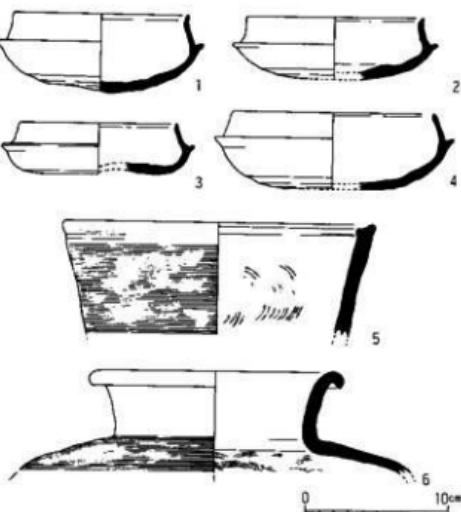


第12図 土坑2 平面図・断面図 (1 : 40)

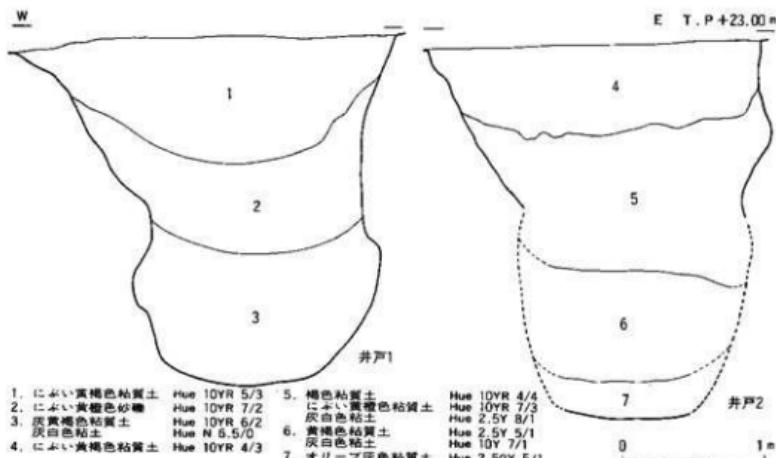
て削平され、東側は調査区外にのびるため平面形状は明確にしがたく、溝となる可能性ものこされている。遺構は、検出した部分で南北幅1.0~1.2m、深さ15cmを測る。

埋土中より多数の須恵器が出土し

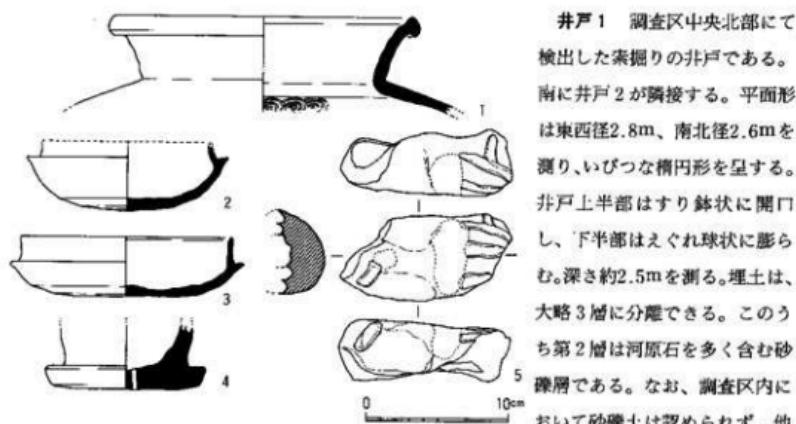
た。出土した須恵器の中には焼き盃のみの著しいものも含まれていた。これらの須恵器のうち坏身の特徴を見ると、口径13~4cmのものが多く、口縁端部の沈線も明瞭であり、受け部にも鋭さが残されていることから、桜井谷編年でII形式1段階のものと考えられる。



第13図 土坑2 出土遺物実測図 (1 : 4)



第14図 井戸断面図 (1 : 40)



第15図 井戸2出土遺物実測図（1：4）

**井戸1** 調査区中央北部にて検出した素掘りの井戸である。南に井戸2が隣接する。平面形は東西径2.8m、南北径2.6mを測り、いびつな構円形を呈する。井戸上半部はすり鉢状に開口し、下半部はえぐれ球状に膨らむ。深さ約2.5mを測る。埋土は、大略3層に分離できる。このうち第2層は河原石を多く含む砂疊層である。なお、調査区内において砂疊土は認められず、他

所より撒入されたものと考えられる。第3層は、植物遺体などを含む自然堆積土と地山崩落土が交互に堆積する、井戸使用時から埋め戻しによる廃絶までの自然堆積層である。なお、第3層埋土中から17世紀頃と考えられる土器皿が出土している。

**井戸2** 調査区中央にて検出した井戸である。平面形は南北径2m、東西径2.5mを測り、いびつな構丸長方形を呈する。井戸上半部はすり鉢状に開口する。下半部については、地山崩壊の危険が生じたため形状は確認できなかったが、井戸1と同様に球形状に膨らむものと考えられる。埋土は大略2層に分離できる。上層は、白灰色粘土、耕作土、包含層または遺構埋土と考えられる有機質土などが層状に堆積する。井戸廃絶後の埋め戻しに伴うものと考えられる。上層中の遺物は既述の埋土に含まれていたもので、伊万里焼と考えられる染め付け碗細片1点とともに古墳時代後期の遺物が多量に出土した。なお、第15図5の土馬頭部も上層より出土したものである。下層は、植物遺体などを含む自然堆積土と地山崩落土が交互に堆積する、井戸使用時から埋め戻しによる廃絶までの自然堆積層である。下層出土の遺物の殆どは須恵器の大きな破片であり、耕作時に掘り起こされた遺物が廃棄されたものと考えられる。

### (3) まとめ

今回の調査は、当初の予想に反して古墳時代から古代にかけての遺構は多く検出しなかった。また、遺物包含層も認められなかった。これらは、本来的な遺構密度の低さもさることながら、後世の当地における開発に伴う著しい削平、攪乱による破壊も一因を為すものと考えられる。その典型に井戸1、2の存在が挙げられる。井戸2は古墳時代の遺物を含む遺物包含層または

遺構	長径(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	色調(Hue)	備考
ピット-1	35.0	-	11.0	暗褐色粘質土(10YR 3/3)	柱痕有り
ピット-2	19.0	-	13.0	" (10YR 3/4)	"
ピット-3	38.0	28.0	19.8	" (10YR 3/4)	
ピット-4	38.0	29.0	15.0	" (10YR 3/4)	柱痕有り
ピット-5	40.0	-	6.0	褐色粘質土(10YR 4/3)	
ピット-6	-	24.0	6.0	" (10YR 4/6)	
ピット-7	-	-	7.0以上	" (" )	
ピット-8	-	30.0 (?)	5.0以上	" (" )	
ピット-9	34.0	32.0	14.4	暗褐色粘質土(10YR 3/3)	
土坑-1	本文記載				
土坑-2	本文記載				
土坑-3	-	-	20.5		
土坑-4	70.0	-	5.05	暗褐色粘質土(10YR 3/3)	
土坑-5	300.0	-	24.5	にぶい黄褐色粘質土 (10YR 6/3) 他	
土坑-6	-	-	5.0	"	
土坑-7	-	182.0	11.0	褐色粘質土(10YR 4/6)	
土坑-8	-	-	8.4	"	
土坑-9	-	-	10.5	"	
土坑-10	-	-	4.5	"	
土坑-11	-	-	16.5	暗褐色粘質土(10YR 2/3)	
落ち込み1	-	279.0	9.0	明褐色粘質土(7.5YR 5/8)	
落ち込み2	-	-	4.0		
溝-1	(幅) 50.0	(長さ) --	12.5	暗褐色粘質土(10YR 3/4)	
溝-2	(幅) 40.0	(幅) -	9.0	黄褐色粘質土(10YR 5/6)	
溝-3	(幅) 30.0	(幅) -	5.0	褐色粘質土(10YR 4/6)	41次西区 SD-3と 同一の遺構
溝-4	(幅) 48.0		20.0	明褐色粘質土(7.5YR 5/8)	
溝-5	(幅) 38.0		16.0	褐色粘質土(10YR 4/6)	
井戸-1	本文記載				
井戸-2	本文記載				
井戸-3	92.0	80.0	-	灰黄色粘質土(2.5Y 6/2)	近世以降

第2表 新免遺跡第40次調査 検出遺構便覧

### 第Ⅲ章 新免遺跡第40・41次調査の概要

遺構埋土を削平して埋め戻し、井戸1は客土と考えられる土砂で埋め戻しを行っている。おそらく、井戸1の埋め戻しの際には、周辺地で埋め戻し用の土の確保が難しくなったのだろう。少なくとも、当調査地周辺の包含層、遺構面の削平が近世の一時期にあり、その一要因に、井戸による用水の確保があったことは確かである。

ところで井戸1、2は、下層埋土にみる多量の植物遺体の堆積や、井戸内の水位の変動の激しさを物語る下半部の地山の崩壊があり、生活用水の確保のために掘削されたものではないことを想起させる。一方、これらの井戸がもつすり鉢状に開口する構造は雨水の集水に効率的である。おそらく、これらの井戸は灌漑用水確保のために掘削されたのであろう。井戸1、2と同じ状況を呈する井戸は、新免遺跡第11次調査区においても発見されており、近世の一時期に当地の耕地が井戸用水に一部依存していたことがうかがわれる。

基本的に当地周辺の主要用水源が駿河急豊中駅東方に点在した、かつての溜池群であったことは言うまでもない。しかし、現状では溜め池の開削時期、水利権の問題については不明であり、これらの溜池と井戸灌漑との関係については、今後の調査に委ねることにしたい。

#### 東 区

遺 構	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)	色 調 (Hue)	備 考
ピット-1	60.0	34.0	7.0	明黄褐色粘質土 (10YR 6/4)	
ピット-2	48.0	43.0	24.0	褐灰色粘質土 (7.5YR 4/2)	柱痕有り
ピット-3	32.0以上	-	21.0	灰黃褐色粘質土 (10YR 5/2)	#
ピット-4	-	-	5.0	褐色粘質土 (7.5YR 5/2)	
ピット-5	44.0	28.0	6.0	にぶい黄褐色粘質土 (10YR 5/3)	
ピット-6	-	-	7.0以上	灰褐色粘質土 (7.5Y 4/2)	

#### 西 区

遺 構	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)	色 調 (Hue)	備 考
ピット-7	24.0	16.0以上	10.0	褐色粘質土 (10YR 5/5)	
ピット-8	46.0	22.0	12.0	にぶい黄褐色粘質土 (10YR 5/5)	
ピット-9	-	18.0	2.0	明黄褐色粘質土 (2.5YR 7/6)	
ピット-10	18.0	17.0	9.0	暗褐色粘質土 (10YR 3/4)	
ピット-11	18.0	14.0	12.0	褐色粘質土 (10YR 4/4)	
ピット-12	-	14.0	7.0	暗褐色粘質土 (10YR 3/4)	
ピット-13	42.0	32.0	15.0	暗褐色粘質土 ("")	柱痕有り
ピット-14	-	-	5.0	にぶい黄褐色粘質土 (10YR 5/4)	
ピット-15	25.0	-	11.0	褐色粘質土 (10YR 4/4)	
ピット-16	-	-	3.0	黄褐色粘質土 (10YR 4/6)	
ピット-17	42.0	17.0	5.0	黄褐色粘質土 (10YR 3/6)	
ピット-18	20.0	14.0	5.0	黄褐色粘質土 (10YR 3/6)	
ピット-19	-	38.0	23.0	暗褐色粘質土 (10YR 4/6)	柱痕有り
溝-1	(幅) 36.0	(長さ) 80.0	11.0	暗褐色粘質土 (10YR 3/4)	
溝-2	(幅) 32.0	-	8.0	にぶい黄褐色粘質土 (10YR 6/4)	
溝-3	(幅) 28.0	-	4.0	褐色粘質土 (10YR 4/6)	40次SD 3 と同一遺構
溝-4	(幅) 26.0	-	4.0	浅黄色粘質土 (2.5Y 7/3)	

第3表 新免遺跡第41次調査 検出遺構便観

## 第IV章 御獅子塚古墳第6次調査の概要

## 1. 調査の経緯

調査地点は、豊中市南桜塚3丁目80番地である。西側には南北の道路を挟んで国史跡御獅子塚古墳が所在する。今回、土地所有者から住宅の立替の申請が提出されたが、御獅子塚古墳の既往の調査から、この建築予定地には濠が存在することが推定されているため、事前に協議を行い、調査を実施することになった。

調査は、推定される濠が確実に存在するかどうか、まず機械掘削により範囲確認調査を実施



第16図 調査地点位置図

し、確認後濠だけではなく、他の遺構の確認も考慮に入れ、建物の予定地内の全面調査に入っていたのである。

このように二段階で調査に望んだのであるが、濠以外の遺構は確認することはできなかった。

## 2. 調査の概要

### (1) 基本層序

調査場所は現在住宅地として平坦に整地されている。しかし調査に伴って表層を剥ぐと南側部分が一段低い地形を呈し、畠地として利用されていた。宅地に利用する際に低い部分は盛土をし、高い部分は地山面をも削除して整地している。したがって高い部分は盛土からすぐ地山で、低い部分は盛土、耕土、地山という層序であった。

### (2) 検出遺構

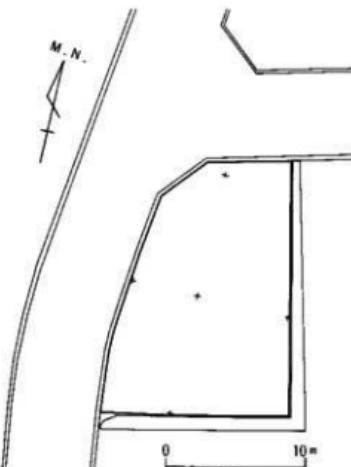
調査の経緯で記したように、御獅子塚古墳に関連するものは濠以外は何も検出することができなかった。古墳以外のものとしては濠が埋没し、畠地として利用されていた際の野井戸と思われる素掘りの円形土坑を検出したが、今回の報告では除外する。

**周濠**（第18図・19図） 調査地の西側部分において、ほぼ推定通りに濠を検出することができた。この位置は御獅子塚古墳のちょうど東側のくびれ部から前方部にかける間で、長さは約20mを確認した。濠幅はくびれ部の所で約12m、南側の前方部で約9mであった。濠の深さは50～55cmである。堆積土は第19図に掲げるよう大きさは4層に大別できる。最下層の第4層は埴輪片のみであるが、第3層からは縄目文様の平瓦片、瓦器片などがみられる。第2層、第1層は近世及び近代の陶磁器類が多く、新しい時期の堆積土である。

出土遺物は第20図に4点を示した。1、2は円筒埴輪で須恵質の焼きである。刷毛目は極く細いもので1はタテ方向に、2は横方向でB種ヨコ刷毛の痕跡がかすかに認められる。3は京焼、4は伊万里焼の椀で18世紀代のものである。

### (3) まとめ

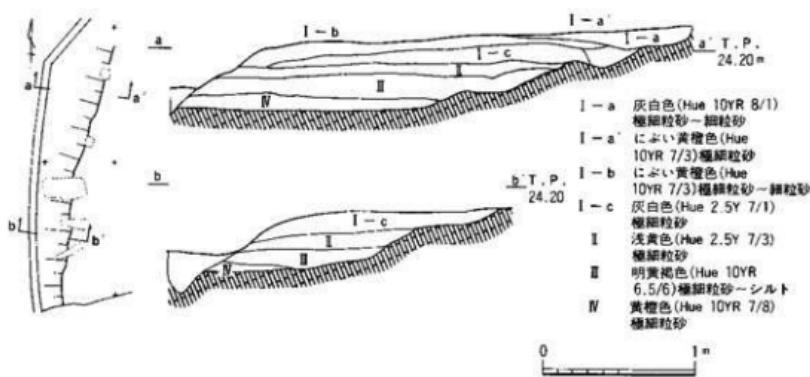
今回の調査の成果は推定されてはいたものの、実際に濠の存在を確かめられたことである。



第17図 調査範囲図 (1:400)



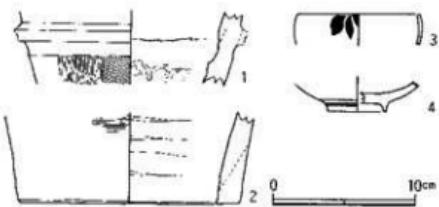
第18図 遺構全体図



第19図 周濠断面図

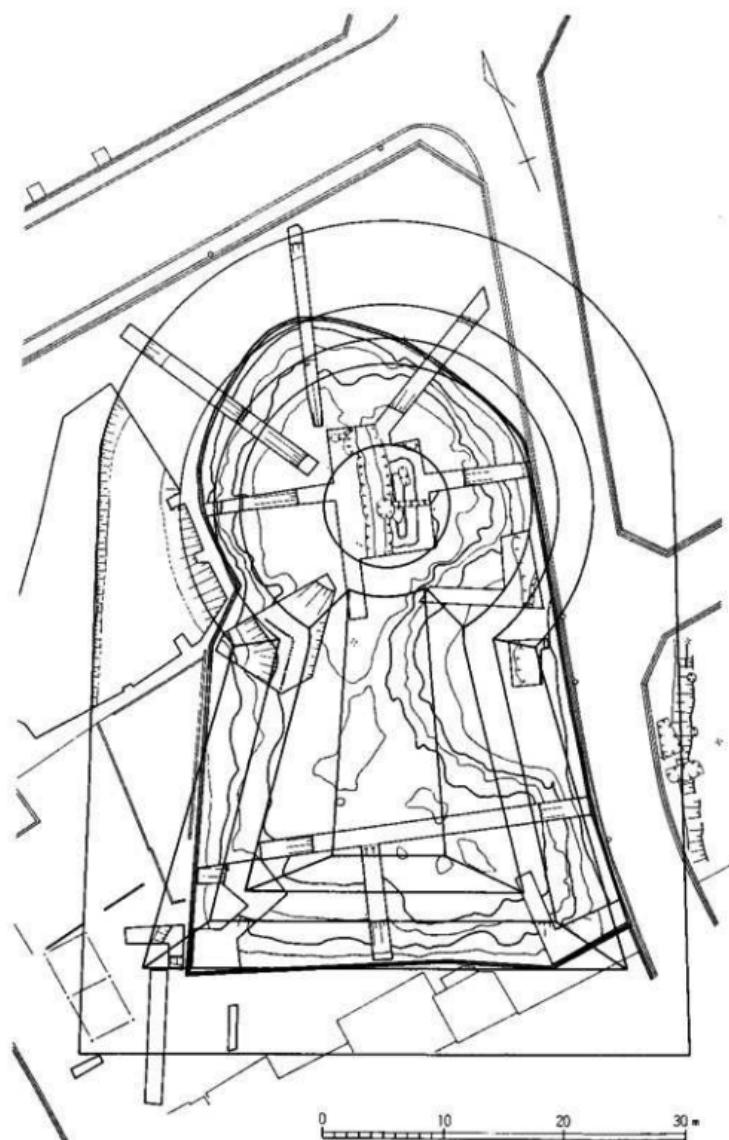
また濠内の堆積土の状況と濠の外側傾斜の関係において気になることがある。それは濠の斜面地の段々と層序がすべて同一で、その堆積土の質から畠地に利用されている可能性を考えられることがある。このことから、濠内を近世に入り、

畠地として利用し、濠の斜面をカットし



第20図 周濠出土遺物実測図

たとみれば、検出状況と合致する。したがって、濠の外側のかたは、現在より内側にくることになり、第21図の推定に近似てくるのである。このことは今まで5次に及ぶ調査から推定した御獅子塚古墳の復元とも合致してくる。



第21図 御獅子塚古墳全体図



# 図 版





(1) 調査区全景（南東から）



(2) 調査区西壁断面



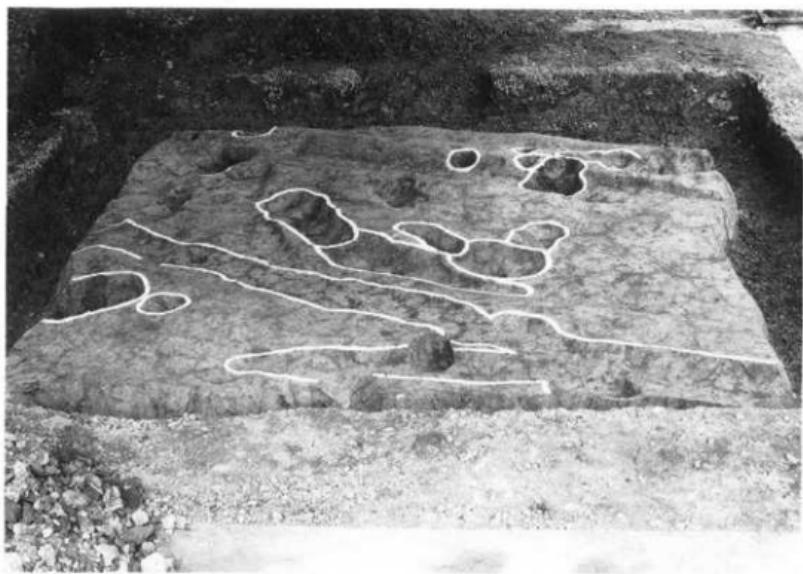
(1) 調査前風景



(2) 遺構検出状況（東より）



(1) 東区遺構検出状況（南より）



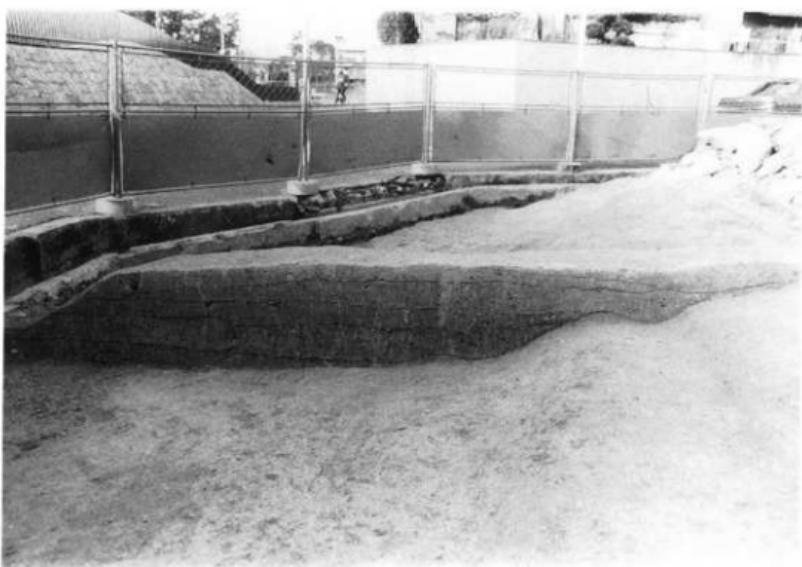
(2) 西区遺構検出状況（西より）



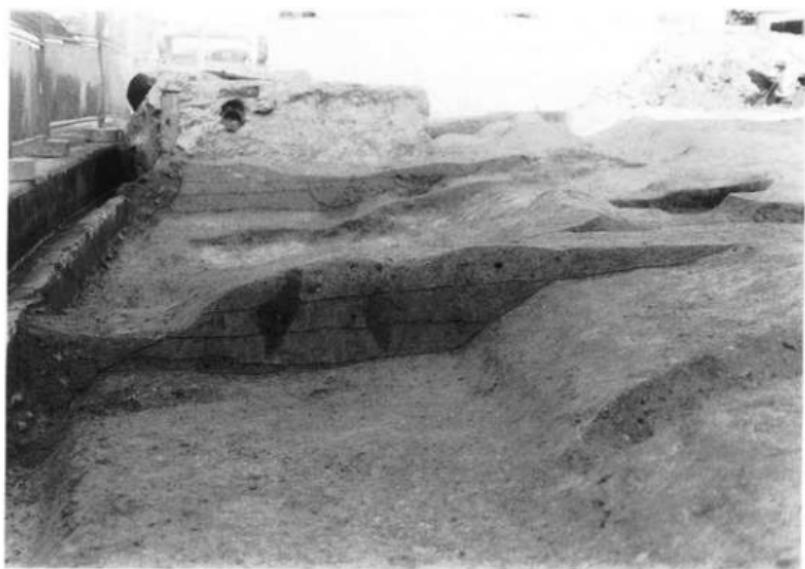
(1) 調査区全景



(2) 周辺検出状況



(1) 周濠断面



(2) 周濠断面



(1) 周濠完掘状況



(2) 周濠完掘状況



(1) 周濠完掘状況



(2) 墓丘と周濠との関係

豊中市文化財調査報告第31集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1992（平成4）年3月

発行 豊中市教育委員会

豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化財保護係

印刷 やまかつ株式会社